

テーマ

登呂博物館と連携した
地域の発見、継承を促す取り組み



キーワード: 登呂博物館、登呂遺跡、参加・体験、紙芝居

○活動に取り組んだきっかけ・背景

本活動は2012年、登呂博物館館長より「地域の宝・登呂遺跡の価値を若い世代が理解し、継承するきっかけとなる教材」の開発が依頼され、研究室の学部生・大学院生の参画によって、参加・体験型「映像教材」（以下、参加・体験型「紙芝居」）を開発したことに始まります。その後「かるた」や「すごろく」の開発に至っています。

○活動の目的

登呂博物館と連携し、開発した教材（参加・体験型「紙芝居」等）を活用した演示や授業を実施することを通して、児童生徒が地域の歴史に親しみ、誇りや愛情を持ち、後世に伝え残していく責任等を自覚・意識できるようにすることを目的としています。

○具体的な内容

登呂博物館と連携し、開発した参加・体験型「紙芝居」は現在まで5種類開発しました。いずれも「登呂ムラ」に特化したものです。これらは登呂遺跡・登呂博物館が有する固有の特徴・特性を明確に描き、そしてストーリーや画像は、考古学、歴史学の成果を生かし、歴史哲学的視点を重視して、事実に基づいた内容となっています。また紙芝居のタイトル（例:「追え!!登呂ムラを」等）は児童生徒の知的好奇心を高め、探究行動を促すように工夫し、最終場面にはメッセージを埋め込み、問題的状况を自覚したり意識したりすることができるような画像やストーリーを置いています。また紙芝居を単に見る、聞くものに留めず、考えたり、発表したり、実際に触れたりできる仕掛け施し、体験的に学べるような内容としています。例えば「矢板」（やいた）を紹介する際には、クイズコーナーを設け、さらに「矢板」を打ち込む体験を通して、登呂ムラでは高床式倉庫等で使われていた部材が「矢板」としてリサイクルされて使われていた状況等を理解させたり、現代に通じる生活の工夫等を考えさせたりしています。こうした取り組みは登呂博物館でのイベントをはじめ、静岡市内の小学校において出前授業として実施しています。

○期待される効果など

児童生徒が参加・体験型「紙芝居」等を通して、地域の伝統や文化・歴史に対する理解を深め、尊重する態度等を育み、アイデンティティ形成のための基盤づくりに資する活動となることを期待しています。



安藤 雅之
大学院 初等教育高度実践研究科
教授、副学長

連携先
静岡市立登呂博物館